# 薬剤師教育センター稼働

## 研修受入や研究で地域支援

### 大分大学病院

大分大学医学部附属病院は、今夏から薬剤師教育センターを本格的に始動した。県内の薬剤師を対象に院内でチーム医療や輪液無菌調製の研修を実施したり、研究活動を支援するなど、地域全体の薬剤師の教育や研究拠点として位置づける。4月から始めた地域病院への薬剤師出向を契機に新設した。出向による増収の一部を同センターの運営に活用し、教員を新たに採用した。薬系大学のない県にある大学病院として、地域全体の薬剤師の資質を高める役割を担いたい考えだ。

同センターは2月に設置。センター長には同院の伊東弘樹教授・薬剤部長が就いた。7月には宮崎大学病院で薬剤部長補佐を務めていた吉川直樹氏が准教授・副薬剤部長兼副センター長に就任し、活動が本格的に始まった。

薬剤師の教育や研究に関する各業務を同センターに集約する。薬学生の実務実習受入や専門・認定薬剤師の資格取得に必要な研修の実施など、以前から取り組んできた業務を移管するほか、新たに薬剤師出向や薬剤師の臨床研修受入などを開始し、研究の支援も行う。

臨床研修として、三つのコースを新設する予定。一つは、同院で急性期医療のチーム医療を学ぶ「薬物治療参画コース」。週1回来院し半年ほど学ぶなど、研修頻度や期間、内容も希望に沿って柔軟に対応する。

「技術習得コース」では、中心静脈栄養輪液の無菌調製手技、院内製剤の調製手技や製剤試験、血中薬物濃度測定手技を教える。基本的には短期間の研修になりそうだ。「研究支援コース」では、論文執筆を目標に研究立案段階から薬剤師を支援。専門・認定薬剤師の資格取得を後押しする。今後、各コースの概要を固めて院内承認を経て、10月から受付を開始したい考え。有料対応を想定している。

同センターは、地域の薬剤師との共同研究も推進する。来年度の運用を視野に薬剤師レジデント制度の設計も進める。薬剤師復職支援プログラムも新たに構築し、7月から受付を始めた。育児等でブランクのある薬剤師を対象に、期間や内容を個別化した研修を院内で実施し、復職を支援する。

薬剤業務向上加算の算定で得られる収入の一部を同センター運営に活用する。同加算は、各地で病院の赤字補填に回される事例が少なくない中、伊東氏は「当院では、診療報酬の連て付けで求められている教育体制の整備や教員採用について理解を得たと強調。「地元に薬学部があれば、地域の薬剤師が教育を受けたり、研究の相談ができる。薬学部がない大分県では、その役割を担うのが大学病院であるべきという考えもあった」と意義を語る。

薬剤師出向は4月から始まった。出向先は県内の杵築市立山香病院（138床）で、薬剤部長補佐の40代男性薬剤師が1年間フルタイムで出向している。杵築市の病院薬剤師の偏在指標は0・32と低く、大分県と協議し出向を決めた。同院に薬剤師は3人しかおらず欠員続きで、出向で感染防止対策加算等の算定が可能になり、医療の質向上や病院経営に貢献できた。

大分大学病院では20年以上前から、地域の要請を受けて週1回土曜日に薬剤師を出向させてきた。現在は5病院が対象となっている。同院の薬剤師数は41人で病床618床に対し少ない。「地域の方がもっと大変。少しでも地域医療を支えたい」（伊東氏）との思いで取り組んできた。

今年、県内の病院に就職した薬剤師は約10人。薬剤師確保が県全体の課題で、今年度から薬学生に修学資金を貸与し、卒業後一定期間県内の病院や県で働くなど条件を満たした場合に返還を免除する県の事業が始まった。同センター設置で薬剤師として成長できる基盤が大分県にあるという認識が広まり、就職希望者が増えてほしいとの期待もある。

伊東氏は「長い目で見た時には、地域の薬剤師全体の教育を担いたい。出向先の病院長からは『新卒薬剤師が入った時の教育を数カ月間大学病院で見てもらえるとありがたい』という声がある」と将来を見据えている。

センター長を兼任する伊東薬剤部長（左）、副センター長の吉川副薬剤部長

薬事日報

月水金発行
薬事日報社
東京本社　〒101-8648
東京都千代田区神田和泉町1
☎（03）3862-2141
FAX（03）5821-8757
大阪支社　〒541-0045
大阪市中央区道修町2-1-10
☎（06）6233-4191
FAX（06）6233-3681
購読料　半年19,764円
（税込）　1年36,234円

きょうの紙面

必要量の購入呼びかけ
コロナ治療薬で　…3
9万9510人が来場
Dgsショー……6
パイ領域支援を本格化
伊藤忠商事……7
特集　4～5
〈和漢医薬学会〉

本号8ページ